

権力と正義の関係について

ラインホルド・ニーバー

(ユニオン神学校教授)

クエーカー派の世界問題に対する接近の仕方には、わたし個人が同意し、またアメリカンズ・フォア・デモクラティック・アクション(A D A)〔米国民主義連盟〕の外交政策綱領と全面的に一致している点が多い。それらは次のごとくである。

I 共産主義との紛争、とくにアジアおよびアメリカにおけるそれは、白人諸国家の有しているかつての「帝国主義」的な背景に起因するものであり、われわれの立場は、「植民地主義」および有色人種に対する白人の横柄さへの反感によって、重大な危機に直面させられている。この危機を克服するためには、道徳的・政治的に過去の罪悪を償うに足るような政策をとるべきであって、それを軍事力によって一挙に解決せんとするがごとき態度をとることは、もってのほかである。一九五五年度のA D Aの宣言文は、次のように述べている。

「われわれは、大量報復政策をすてて集団改心をとるべきである。われわれは、世界問題の一つであるアジアとアフリカの新しい情勢をより正確に観察し、現存する植民地主義と人種的差別に反対するためのより具体的かつ積極的な政策をもつべきである。このことなくしては、われわれの経済援助に関する諸計画が、われわれと世界の他の国民との間の共通利害関係を発展させ、ひいては世界的規模において共産主義的全体主義を後退させるための必要な力を提供するという使命を全うすることができない。」

II われわれの共産主義に対する否定的な態度、すなわち、共産主義を悪と見なすわれわれの偏見、純粹の反逆とたんなる反対とを混同してそのいずれもを「危険視」するようなわれわれの気違いじみた行動などは、世界におけるわれわれの威信を傷つけ、共産主義との真の対決をさまたげている。幸いにして、いまや国民のより冷静な態度によって、かの「マッカーシー主義」なる気違いじみた風潮は、克服されたかの感がある。しかしながら、A D Aは、クエーカー派と同じく、引きつづき『すべての米国人がけっして譲り渡すことのできない諸権利——言論の自由、思想の自由、探求の自由、反対の自由……——をあくまで守りぬくこと』を誓い、「もしこれらの自由が不具化されたならば、民族、国家、地方の別を問わず、民主主義の原理は侵害され、民主社会は全体主義に対する抵抗力を喪失するにいたることを確信する」。

III 軍事兵器一般、とくに原子力兵器のみに依存して、非共産主義の統一とその健全性を促進するための政治的・経済的・道徳的な諸政策のすべてをおろそかにするということは、すべての民主主義勢力がその力を結集させるといふ点で、重大な誤りを犯すことになる。

しかしながら、われわれは、世界共同体内の軍事力の限界に関する

知識にもとづいて、平和主義的な力の否定を受け入れるように説明するようになることはすべきではないと考えている。力は、政治の分野における最後の手段にすぎない。もちろん、それを正当にとり扱うようにあらゆる努力を払うべきことはいうまでもないが、とにかく力を否定することは不可能である。

そこでADAは、「ソ連ブロックに対する米国の政策は、ソ連の政策はたんにすべての勢力を敵視しているだけでそれを支配せんとしているのではないという前提の上に立てられるべきであり」、「軍事力の弱体化は侵略を招く」という風に考えているわけである。したがって、ADAは、われわれが軍事力を保持することに賛成である。そしてADAは、「ソ連ブロックに対するわれわれの政策は、挑発なき防衛であるべきだが、いつでも交渉ができる準備をととのえておくべきである……その時機とは、ソ連集団がすすんで現在世界を二分しているすべての障壁を除去する誠意を示しているという徴候があらなくなったときである」ということを主張する。

われわれがクエーカー派の提案に同意する点は、主として究極的な力の否定の問題と関係のない諸政策についてである。そこで、われわれは、平和主義的政策と非平和主義的政策との基本的な相違をはつきりさせておく必要がある。この両者の差は、一に平和主義者たちの絶対的な力の否定を受け入れるか否かによってつけられるはずのものである。

しかるに、平和主義と非平和主義の具体的な相違は、力ないしは「暴力」の使用の問題よりもっと意味深長である。クエーカー派の主張それ自身が、両者の真の相違というものをあきらかならしめてくれている。クエーカー派の政治問題に対する態度は、「権力」と「愛」とを互いに矛盾した両立しえないものであると断定している。この矛盾のゆえに、正義の向上に関するすべての問題がおろそかにされがちである。正義は愛の下僕であり、権力は正義の下僕であるはずである。史上にあらわれた正義とは、権力の均衡によってえられたもので

ある。狭義の力は権力の源泉であり、権力は力よりも幅が広いわけである。権力は、人間が目的を達成するために求めてやまぬあらゆる生活力を包含している。

権力そのものは悪ではない。それは、良い目的のために行使することができる。人間ないしは国家相互の目的が対立する場合には、その抗争が暴力問題をひき起こすことはいうまでもない。心ある人びとは、国家的ないしは国際的な暴力抗争を回避せんと努力するのである。では、一体いかなる場合に力の使用を全面的に放棄しうるかといえば、それは力に訴えるよりも不義に耐える方がよいという原理をえらんだ場合だけである。もちろん、それは、賢明な策とはいえない。これが可能なのは、紛争を最終的な事態に到達せしめるよりはむしろ不義に耐える方がよいとする人びとだけである。しかしながら、自己の生活以上の価値に責任をもつ政治家たちには、その方途をえらぶ自由がない。政治家たちは、利害調整という手段をおして正義を求め、そのことを義務づけられている。かれらは、必要とあらば力によって貴重な価値を守らなければならない。このような責任を全うするためには、おそろしい原子戦争のごとき双方共倒れとなる可能性のある力の使用にちゅうちよするのが当然とはいえず、それをもあえて辞さぬだけの覚悟が必要なわけである。

いかに戦争の新たな破壊性の脅威を強調しても、それが政治家の責任を大幅に変更させるようなことはありえない。アイゼンハワー大統領がいつているように、「原子力時代においては、平和はかけがえないものである」ことは当然であり、政治家たちもこれに同意するのである。しかしながら、戦争か平和かのいずれかをえらぶばあいではなしに、もし降服か戦うかの岐路に立たされたならば、平和の代価として不義ないしは降服を受け入れるというようなことは、とうてい不可能な相談である。われわれは、政治家たちにそのような危険に陥ることのないように望みたい。それに、将来の危機を回避するために現在の降服をえらぶというような国家はありえない。こう見てくるな

らば、平和主義なるものは、原子力時代においては、ことさらに見当
違いな考え方であるということが明白である。だからといって、なに
もクエーカー派の主張は軽べつに値するといっているわけではない。
その主張は、クエーカー派の慈善事業と見なせば非常に印象的である
が、政治的秩序に関した問題と見るならば、権力を正義に奉仕させ、
必要に応じて力を権力と正義の武器と見なすのが政治的秩序というも
のであるという点から考えると、これほど印象のうすいものはないと
いえる。